

史料紹介

『女實語教寶箱』

「女實語教寶箱」を読む会

はしがき

ここに翻刻して紹介するのは、教訓を主題とした江戸時代の女子用往来（手習い教本）『女實語教寶箱』である。

この書は、大本、二段組で、下段に「女實語教」本文が6行割・10字を標準として刻字され、上段には「女堪忍記」が挿絵と共に載せられている。刊記はない。

本文である「女實語教」は、弘法大師作の『實語教』になぞらえたという「女實語教」（1丁表～8丁裏、四七ヶ条）と、安然和尚作の『童子教』になぞらえたという「女童子教」（9丁表～30丁表、一二八ヶ条）から成っており、作者は、女性の往来物作者として数々の作品を残した居初（いなづま）つな（津奈・生没年不詳）である。「女實語教」は元禄八年（一六九五）の初刊の後、改編されて、江戸時代後期まで『女實語教寶箱』『女實語教鑽囊』を初めとする様々な体裁の版が作られ出版された。

頭書部分および巻頭・巻末頁の「女堪忍記」の記事は、『女堪忍記大倭文』（長谷川妙琳書、正徳三年・一七一三年初版）から採られたものである。「女實語教」と「女堪忍記」を併せることで、『女實語教寶箱』は女子のための教養・実用を兼ねた書となっている。

この翻刻は最初、関西大学大学院文学研究科の藪田貫教授ゼミで教授所蔵の本書をテキストに授業の一環として始まり、その後院生の勉強会でこれを継続し、関西大学非常勤講師吉川潤氏の助言を得ながら翻刻を進めた。今回の史料紹介に当たっては『女實語教寶箱』全体の内容を知ることが重要と考え、「女實語教」を下段に全文翻刻して載せ、上段と巻頭・巻末には、一部抜粋した「女堪忍記」を図版入りで掲載した。「女實語教」の文頭には丁数を記した。漢字・ルビはできるだけ原文通りとしたが、読点・並列点の補足や改行は適宜行った。意味の取りにくい語については傍線をつけ、（ ）内に語を補うか文末に註を付けた。註は、広辞苑と日本国語大辞典に依った。酒田市立光丘文庫がほぼ同本と思われる版本を所蔵し、国文学研究資料館のデータベース上で公開しているので、適宜この画像を参照させていただいた。

『女實語教寶箱』を読む会」のメンバーは、仲田侑加・山本久美子（以上、関西大学大学院博士課程前期課程在籍）、古林小百合・水上哲治・安藤久子（以上、関西大学大学院博士課程前期課程修了）の五名である。末筆ながらご指導頂いた藪田教授と吉川講師に心よりお礼申し上げます。

参考文献

小泉吉永編『女筆手本解題』（青裳堂書店、一九九八年）

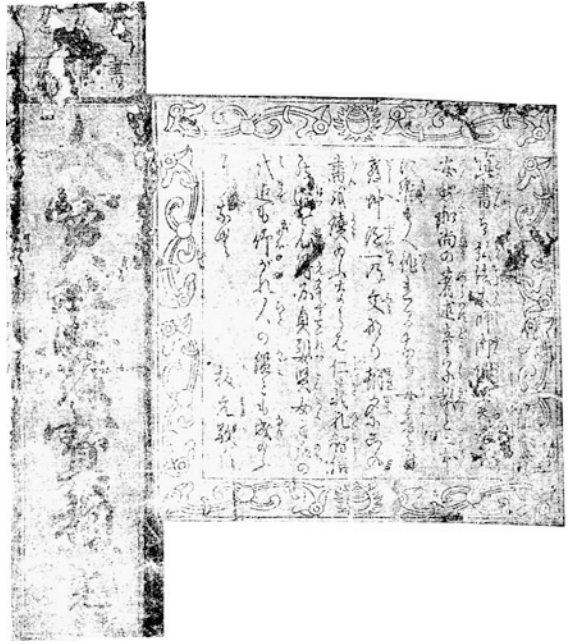
(題 簽)

頭女忍
書堪記

女實語教寶箱完

此書は、弘法大師御作の實語教、安然和尚の著述童子教と、二本に准らへ作れるなり、女童の教艸随一の文なり
朝夕にこの書を讀給ふならば、仁義礼智信の道を心得、
必 貞烈賢女と后の代迄も仰がれ人の鑑とも成給ふになむ

板元敬白



秋野七種

萩 和名 しかなくぎ、唐名 天竺花、万葉 芽子

咲まじる のへのあき風吹ミたし おきなな袖も はきか花すり

葛花 唐名 葛

露ながら いろかはるより秋風の

ふくをうらむる のへのくすはら

女郎花 唐名 敗醬

なひくとや 人は見るらん女郎花 思ふかたにそ かせもふきける

撫子 和名 とこなつ、唐名 瞿麦

やまかつの かぎほなりとも をりくは

あはれをかける なてしこの花

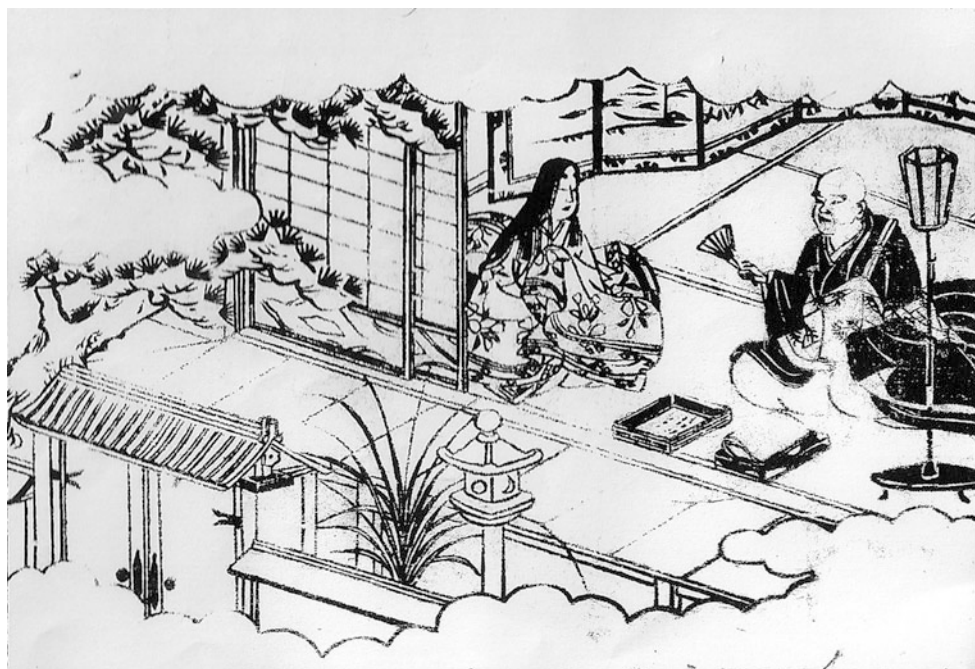


をの、こまぢろ
小野小町

小町ハ出羽の郡司小野吉實か女にて、仁明天皇承和のころの人なり、数
十年在京して好色の名あり、歌ハ衣通姫の流なり、扁昭・業平・安倍清
行・文屋康秀など歌よみかハせしなり、後撰集にいそのかミといふ寺に
まうで、日のくれにければ、夜明てまかりかへらんとて、と、まりて、
此寺に扁昭侍ると人の告げれば、ことのい、こゝろミんとていひ侍りけ
る

へ岩のうへに旅ねをすれはいとさむし 苔の衣をわれにかさなん
返し 扁昭

へ世をそむく昔の衣ハたゞ一重 かさねはうとし いさふたりねん
又玉つくり小町といふハ別人のことなるへし、能因の説に屍八十嶋にあ
りといへり、なり平、小町のどくろにす、きおひ出たるが、秋風のふく
につけねてもあなめくといひけるに、おのとハいはじす、きおひけり
とつけ給ひけるよし見たり、世に七小町といふこと侍り、此ことたしか
ならず、あるひハ観音の化身といへり





女實語教

(1才)

- 一、品勝れたるが故に貴からず、心正しきを以てよしとす
- 一、容れしきが故に貴からず、才あるをもつてよしとす

(1ウ)

- 一、富ハ是いける内のたから、身まかる時ハ則退く
- 一、智恵ハこれ万代の宝、命終る時魂に従ふ
- 一、心を慎まざれば義なし、義なきハ畜類に等し

(2才)

- 一、勤学バされば才なし、才なきは草木に等し
- 一、眉目かたちハ衰ふれ共、貞女の名ハ朽ことなし
- 一、幾の金を積といへ共、心の直なるにハしかず

(2ウ)

- 一、同胞つねにあはず、妯娌を姉妹のごとくすべし
- 一、かたちを色どることなく、ころろざしを慎しむべし
- 一、姿は日々ニかじけ、たましひ八年々に衰ふ

妯娌(あいよめ)：相嫁、兄弟の妻どうし。

かじけ(粹ける)：やつれる、生気を失う、やせ衰える。

孝婦米袋を得る



もろこし常刃の東窟村といふ所に元石夫といふものあり、母一人をもつ、としおひ両眼しいたり、此よめ姑によくつかふることたくひなし、ある時飯を炊ておきて、おつとをよびにゆくるすに、しうとめ、飯をうつさんとて手にあたるうつハ物にめしをうつしをくを、よめかハりてみれば、子共の大小便をとる物に食をうつしたりけれ共、よめ何ともいはず又炊なをすへきこともならず、その飯のまん中のよき所をしうとめにまいらせ、次をおつとにあたへ、きたなき所をミづからくひてけり、ときに門のまへに物のおちたる音す、よめおどろきてミれば、ふくろ也、中に米三、四升ほど入てあり、姑これをさぐりけるに、両眼たちまちにひらきたり、さて此米をあしたるに、夕ハもとのごとくつくることなく、ついにうとくの身と成けると也

(3才)

- 一、幼時手習ことをせざれば、年闕て悔ともかひなし
- 一、故に物習ふに飽ことなかれ、ぬひ針に怠ること勿れ
- 一、眼を除て讀書を学べ、飢を忍で續綜を習へ

(3才)

- 一、姑にあひて業を学ざれば、家を修め持ことかたし
- 一、夫に従ふといへ共勤疎なれば、身をたつることあたはず
- 一、姑はよめを愛し、嫁は舅姑をうやまへ

(4才)

- 一、富る家にとつぐといふ共、奢りたかぶこと勿れ
- 一、貧しき人の妻となる共、夫を恨ミ罵べからず
- 一、父母は天地のごとし、舅姑八日月の如し

續む：麻・苧などを細く裂き、長くつないでより合わせる

宋鮑蘇か妻女宗



もろこし宋の鮑蘇といふ人、衛の国に行きて、つかへてミとせの間かへらす、衛の国にてこと妻のむかふ、宋の妻は此ことを聞といへとも少もうらミス、姑をやしなひてます、孝をつくし、たよりをもとめて衛の国の妻のかたへさま、物を、くる、宋の妻のあね、此ことをき、て、はやく家をのきて帰るへしとい、ければ、妻こたへていふやうハ、女の道ハ二たひ心をあらためず、夫しすれともかさねて人にゆかず、織績をし、姑につかへて、をこたる心なくたゞ一筋なるを貞といふ、よくしたかふてわたくしなきを順といふ、天子に十二人・国大名に九人・さふらひに二人のつまあり、女に七ツのさるる、ことあり、おつとをさるることなし、みづからがあねなくは、おつとの家をまもり道をおしへ給ふへきにとて、ますくしうとめにつかへけり、宋のミかときこしめして、大にかんじ給ひ、女宗とて女のつかさといふ名をそ給はりける

(4ウ)

- 一、夫は主君のごとし、妻は従者のごとし
- 一、父母にハ朝夕に孝を尽し、舅姑には日夜に事れ
- 一、夫婦争ひ喚ること勿れ、理をまげて夫に従へ

(5オ)

- 一、嫂にハうやまひを致し、弟嫂には愛をあつくせよ
 - 一、女として愛敬あらざるハ、岩木の情なきに異ならず
 - 一、嫁として孝の心なきハ、鳥獸に異ならず
- (5ウ)
- 一、三の教を守り慎まずんば、なんぞ五の障を免れん
 - 一、四恩を報ずる心なくんば、誰か八苦の身を保ん
 - 一、女は地獄のつかひ也、よく仏の種子をたつ

三の教：三従の道。女性が従うべき三つの道。

家にあつては父に、嫁しては夫に、老いては子に従う。

五の障：五障。女人が持つ五種の障礙(障害)。

すなわち梵天王・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏身となりえないこと。

四恩：衆生がこの世で受ける四種の恩。心地観経では父母・国王・衆生・三宝。

八苦：人生上の八種の苦難(四苦八苦)。人生の苦の総称。

生・老・病・死の四苦に愛別離・怨憎会・求不得・五陰盛を加えたもの。

妾の子を狗となしてうくるむくい

もろこし唐の歙縣といふ所に、他国にかよふあき人ありて、二、三年もかへらさることあり、妾をきて子をまうけたり、妻はてかけの子をにくみて、夫他国へ行きたる跡にて、其子を庭の土のうへにおひをろし、くひものをもなげてくらわせ、名を狗児と付てよぶ、妾かなしみてたきあくれば、うちおとす、その子三歳なれとも立あがらず、はらばひて食をくふさま狗のごとし、おつとかへりければ、妻、子のありさまをかたる、おつとき、ためしみるに、いふかごとし、おつといかりて、その子をふみころす、妾はおそれまとい、くびく、りて死せり、いくほどもなく、その妻にはかに狂らんし、地にたふれて腰ぬけて立もあからす、



たゞ狗のありさま也。おつと、是ハいかなる因果とかなしミければ、となりの人、日ころのありさまをかたりければ、はしめてむくひのほどをしりぬ、妻も七日めに死せり

(6才)

- 一、面はぼさつに似たれども、心は夜叉なりと説く
- 一、姑を敬ハ母のごとく、継子は子の如く愛せよ
- 一、夫を恭ひ事れば、夫また妻を感む

(6ウ)

- 一、己夫の親を敬へば、夫また己が親を敬ふ
- 一、わが身を銚おこらんより、まつ夫の衣をすけ
- 一、他の妻の邪なるを見て、みづから慎ミ嗜べし

(7才)

- 一、他の夫の正しきを見てハ、ひそかに夫を諫べし
- 一、善事を見てハ速に進、悪事を聞てハ吾身を慎め
- 一、情ふかき人は福を蒙る、こゑに木魂の答がごとし

漢の鮑宣か妻の賢

漢の鮑宣がつまハ、桓氏かむすめなり、はじめて其家にきたりけるとときハ、その衣ふくきらびやかきにして、うつくしう出たちたり、鮑宣すこしもよろこぶ色なく、物もいはず、つまその心をしりて、めしつれきたる女をミなわかおやのもとへかへし、ミづから身のかざりうるハしき衣ふくをぬぎすて、すそみしかき袖せはきものを着して鮑宣と、もにいとなミ、水をくミ飯をかきして、おつとをうやまふこと君につかふるがごとくにせり、これよりその者天下にきこえて、ともにたかき官にあづかりけり、さのミに、おつとをせたけ、そらうたがひして、物ねたミふかくこゑたかく口こたへして、我かおつとをあなどりかろしむる、是すでおつとにうとまるへきもと

におつとにうとまるへきもと
るなり



(7ウ)

- 一、妬ふかき人は禍を招く、身にかげのはなれざるがごとし
- 一、富るといふとも貧を忘す、賤しき人を諷るべからず
- 一、或は始ハ榮へ終おとろへ、又ハ先に貴く後賤あり

(8オ)

- 一、夫習勤むべきハ、讀書うみ紡縫針の業
 - 一、又学び心得べきは、敷しま絲たけの道
 - 一、但品に従ひ法あり、また身に應じて程あり
- (8ウ)
- 一、いとけなきときハ父母に従ひて教をうけ
 - 一、嫁ては夫にしたがひ、老ては子に従ふべし
 - 一、これ女の三従なり、身を終まで忘る事勿れ

敷しま…「敷島の道」の略。和歌の道・歌道。

絲たけ(糸竹)…楽器の総称。糸は琴・三味線などの弦楽器。

竹は笛・笙などの管楽器をいう。糸竹の道…音楽の道。

ねたまずして歌よむにかんず

むかしある男、そのつまに心さしうすらき、めつらしき女をよひいれて、あさからすちきりけり、此妻いさ、かも心にかげず、うらミたるけしきもなく、日かずふるまゝに、秋乃夜のながきにいと、ねられもせず、ともしびをか、け、かたぶき給けるに、折ふし鹿の音かすかにきこえければへわれもしかなきてそ人に恋られし

いまころによそにこゑをきけども

としのひこゑに詠しけるを、かのおとこ聞てかきりなくあはれにおほへて、今の女をハいたしやりて、もとの妻に二心なくして過にけり、へそれ世の妾ハおつとをたふろかし、なくさめ、身をたしなミ、かほかたちをつくるひ、心をうばへとも、そと心ハマことすくなければ、家にあるつまのまことあるにハ、つゐに心ひるがへるへし、それをまたで、かんにん心なく、いひの、しるハ、ながく思ひすてらるゝことそかし



(9才)

- 一、夫上つかたの御前には、起居を恭しうせよ
- 一、途中におひて八愼んで礼を為し、仰事八敬で聞け
- 一、手をつきしとやかに向かひ、そゝろに外を見るべからず

(9才)

- 一、問ひたまはずば答へざれ、宣ふ事ハつゝしミて聞け
- 一、三寶にハ三たび礼をなし、神明をば再び拝すべし
- 一、御陵を過るときハ恐愼ミ、屋しろを過る時ハ深く敬へ

(10才)

- 一、宮寺に詣つるときは、けがらはしきを慎むべし
- 一、内外の書をあつかふに、おろそかにいたすべからず
- 一、客人はよくあひしらひ、夫にはよく事るべし

三宝：仏教で信仰の対象となるもの。仏・法・僧の三つ。
神明：神。神祇（天神と地神、天つ神と国つ神、かみがみ）。

やまとの国弥太郎が妻物語



中ころ、ならに、ミめよきむすめあり、三条いづみや平六といふ者、ぬすミとりてつまとしけり、二とせすきて、平六はつらひて、いまはの時つまをよびて、われハはやしぬへし、思ひのこすことハ、我むなしくなるとも、二たびおつとをもち給ふな、此やくそくたがへ給ハ、うらむべしといふ、つまかミをきりてちかひしかば、よろこひてし、ぬ、一周忌も過て、こほり山のさかいや弥太郎といふ者、親にいゝて、もらふ、女もぜひなく行しに、平六三年忌にあたりけるころ、弥太郎ハ河内国にゆきける跡にて、夕たちしたるゆふくれ、いなびかりのうちに、平六ありくと見えければ、女ハきもをけし、うつふしにたふれけるを、何かハ

しらす首のほとりにくらひつくこと恐々て、くひちぎりたるあとあり、百日ばかりなやミいゑたり、さきのおつとのしうしんなり、此こと弥太郎妻みつから袋中長老へさんず物かたりしけるとなり

(10ウ)

- 一、婦人礼を正しうすれば、舅姑にも義あり
- 一、嫁として礼義なれば、名をくだす事あり
- 一、他に往て徒言いはず、事調ひたらば帰るべし

(11オ)

- 一、何にふれても友に違ず、いかり恨みて中惡すべからず
 - 一、言葉多き女ハ品少し、遊女の諂ひ淫るゝごとし
 - 一、懈る女は酒をこのむ、淫女の客になるごとし
- (11ウ)
- 一、あだしき女は危事あり、いさきよく貞女の道を守へし
 - 一、鈍き女ハ家を治がたし、すみやかに勤堂へし
 - 一、詞は梱より出すべからず、密にしても譏こと勿れ

あだしき(徒しき・空しき)：空しい、実がない。徒し女：情婦。浮気な女。梱：しきみ(闔・こん)。とじきみ。門の中央に立てるくい。門の内側のしきり。

諸寺略縁起

和州長谷寺

長谷寺ハ昔洪水ありて、近辺高嶋郡三尾の崎よりながれ出る木あり、そのいたる所災あり、和笏の葛下の郡、出雲の大満といふ者、木のことをき、靈材ならんことを思ふて願を發し、十一面の像を刻んとはつすれ共、大木なれば、たやくす動かすへからすと思ひ、こゝろミに繩をか



けここれをひく、かるきこといふはかりなし、しかもいくばくならず大満せんげし給ふによつて、はせの川上にすたりて、としをふるること百年におよへり、沙弥徳連といふ者、養老四年にうつしをく仏を刻んとすれとも、力なし、時に藤原の房前、勅を奉して米をあたへて、その料とす、神龜四年に仏像なれり、行基僧正の開眼也、いまに靈験あらたにして、もろこしまでも聞へたりと也

(12才)

- 一、身は住べき所にありて家業を暫も怠ことなかれ
- 一、男八三徳を治て迷ことなく、愁る事なく恐るゝことなし
- 一、女八三の従ありて五障の罪ことにふかし

(12ウ)

- 一、物いふときハ静にいひて、唇をひらき顯すべからず
- 一、悦しきことにもいたく笑ハず、はら立にも甚しく怒べからず
- 一、一度ことばを過しては、世の譏り舌をかへさず

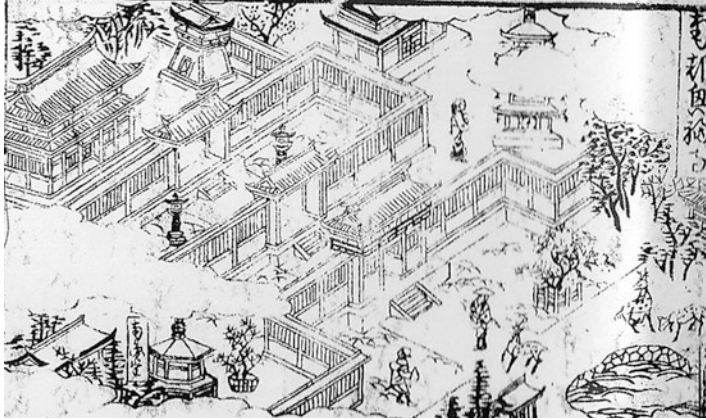
(13才)

- 一、白珪は人を褒て富ミ、離珪八人を誘て悔有
- 一、禍と福に八門なし、ただ人の招にあり
- 一、天の災ハ免るゝ事有、自の災は遁がたし

三徳：三つの徳目。「中庸」智・仁・勇。「書経」正直・剛克・柔克。

「周礼」至徳・敏徳・孝徳。「大戴礼（四代）」天徳・地徳・人徳

南都興福寺



興福寺ハ和銅三年、藤原不比等、和笏平城においてこれをたつ、大殿の像ハ大織冠の造る所也、はじめ皇極天皇の御時、蘇我入鹿、山背王子の弟を弑すの後、奢侈はなはたし、中の大兄王子と鎌足これをうれひて、輕王子と帝と共に入鹿を誅すと欲す、鎌足大願を發して丈六釈迦の像をつくらん思ふ、つゝるに入鹿を宮中に刺ころす、これより藤原氏繁昌し給ふ、こゝにおいて寺をいとなミ仏像を安し給ふハ、鎌足の御意なり、弘仁四年諫議大夫・藤の冬嗣、寺において南円堂をたて莊嚴美をつくし、四天王等の像を安し給ふ、此時藤原の家や、すいびするゆへに、南円堂を構給ふ、それより富栄給ふとなり

(13ウ)

- 一、それ善を行ふ家には、よろこばしきこと餘りあり
- 一、又悪を作る處には、わざハひ猶あまりあり
- 一、人として陰徳を行へバ、かならず陽の報あり

(14オ)

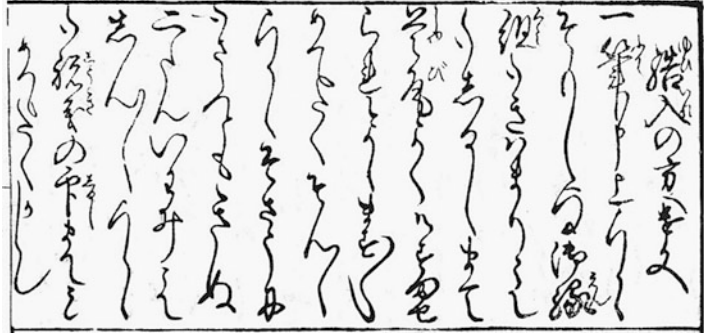
- 一、夫としてハ外をつとめ、女は内の營をすべし
- 一、信ある人のかどには、災の雲おこらず
- 一、慈悲深き人の家にハ、幸の月ほがらかなり

(14ウ)

- 一、心の等しからざる八面の如し、水の器にしたかふがごとし
- 一、他の男を褒こと勿れ、他の女をそしらざれ
- 一、姑のこゝろバせを見て、よめのいましめとせよ

(15オ)

- 一、嫂のおとなしきを、弟よめの師とすべし
- 一、善心つもりて幸を蒙り、悪念極て災多し
- 一、善人は死て譽を残し、悪人ハ死して譏を残す



結入の方遣文

一筆申上まいらせ候

そもし様御縁

組御きまり候て

御しるしまて

首尾よく御すませ

られ候よしますく

めてたくそんし

まいらせ候そさうに

御さ候へともきぬ

二たんいわいにて

しんしまいらせ候

御祝義の印まで二候

めてたくかしく

祝言二遣す文

御祝言しゆひよく御と、のひ、千秋万歳めてたくそんしまいらせ候、御

二かた様、さそくうれしく思しめし候ハんと、をしはかりまいらせ候、

御祝義のしるしまてに、御樽さかな進しまいらせ候、幾久しくいまいま

いらせ候、めてたくかしく

(15ウ)

一、貴人の妻となるとも、嬬をあなとる事勿れ

一、よき人をもあらはに誉され、よからぬ人ねたミを含む

一、家に入て八作法をとへ、夫にあふては心はせをとへ

(16オ)

一、舅に逢ふて八舅に従ひ、姑にあひては姑にしたがへ

一、親類に行て八子供を問へ、愛敬あらんがためなり

一、女は三界に家なし、夫の家を家とするなり

(16ウ)

一、愚にして慮なくんば、必ず近き愁あるべし

一、管を用て天を窺がごとく、針を用て地を刺に等し

一、神は悪人を罰し給ふ、苦しむるに非ず懲がため也

(17オ)

一、師匠弟子を戒むること、悪に非ず直からしめんと也

一、生れなからにして知者なし、習ひ勤て心をつゝしめ

一、貴き女ハおとなしやか也、賤しき女はをぐる心甚し

誕生のかたへの文

やすくと御平さんあそはし、ことに御若子様にて、御二方様ともに御そくもしのよし、かすく御めてたくそんしまいらせ候、御悦ひのしるしまてに産衣一重進上いたしまいらせ候、かすくいわいまいらせ候、めてたくかしく

髪置祝ひの文

御そくもし様、御髪置遊はしてのよし、めてたくそんしまいらせ候、御いわいのしるしに、しら髪綿并未廣しんしまいらせ候、御そく才にて雪を御いたゝき、すへひろく御繁昌遊ハし候やうにとの、心はかりに御入候、めてたくかしく

宮参りの文

御若もし様、御みやまいりあそはされ、こなたまで御祝下され、かたしけなく、いわい入まいらせ候、まことに御成人のほどねかひまいらせ候、後ほと参、おめもし様に御礼申上候べく候、幾千代の御よろこひと、めてたくかしく

髪置祝い：幼児が頭髪を初めてのばす儀式。すが糸で作った白髪をかぶせ、頂におしろいをつけて祝う。近世、公家は二才、武家は三才、あるいは男子三才・女子二才、庶民は男女三才の時、多く陰暦十一月十五日に行つた。かみたて。櫛置き。

(17ウ)

- 一、富といふとも貧心多は、貧人に劣るべし
- 一、貧といふとも楽心あらば、富る人にまさるべし
- 一、邪なる女をめとれば、家を亡ぶに遠からず

(18オ)

- 一、よろしき女をめとれば、富さかふるにほどなし
- 一、夫に従はざる女をば、早く里へ帰すべし
- 一、和らがざる女を宥とすれば、仇を生じて罵ことあり

(18ウ)

- 一、心にまかせて頑なるハ、野等猫の人に順ざるがごとし
- 一、心をつゝしめて和かなるハ、飼鳥の人になるゝがごとし
- 一、善人に従ひて直なるハ、麻の中の蓬のごとし

(19オ)

- 一、悪き人にしたしみて曲れるハ、藪の中のいばらのごとし
- 一、親にかたり姑に付ても、績つむき縫針を習へ
- 一、生れつき愚なりといふ共、習はゞ自ら手利とならん

伊勢参の方への文

御参宮遊さんくわあそハされし道みちすから、御息災そくさいニて御下向げかうなされ、めでたく存まいらせ候、殊ことニかすく御みやけ送下おくりされ、かたしけなく存まいらせ候、御苦勞くろうニ思おもし召候めしハんづれとも、御さしあひも御さなく候ハ、明日みょうじつさかむかひ致参いたまらせたく候、御慰なぐさながら御出いでまち入いまいらせ候、めでたくかしく

とふらひの文

誰様たれさま、御いたはり御へいゆふなく御過遊すまあそされ候よし、驚おどろまいらせ候、わけて、もしさま御なけきおしはかり、御いとをしくそんしまいらせ候、さりながら世のならひニて御さ候へは、御なけきを御やめなされ候て、よくく御とふらひあそばされまいらせ候

湯治見まひの文

有馬ありまへ御湯治たうぢあそばされ、湯も御相応そうおうなされ候よし、めでたくそんしまいらせ候、めつらしからず候へとも哥質かちん百、肴さかな三三しゆおくり進しんしまいらせ候、いよく御本復ほんかくと悦申候御事ごごニて、なをあかりの時、くハしく申まいらせ候、めでたくかしく

坂迎へ・境迎へ：遠い旅から帰る者を村境に出迎えて酒宴をすること。酒迎。

哥質かちん(かちん)：女房詞。搗飯かぢい(カチイ)から、餅

(19ウ)

一、一日いちじつに針ひとはりならへば、三百六十はり

一、ひと針ひとはりは綻ほころをおぎなひ、一端いつたん仕立したつ八膚はたを隠かくす

一、ひと色いろの師しをも疎おろそかにせされ、況いはんやよろつの習なへるをや

(20ウ)

一、趙孝婦ちやうかうふは、姑しつとめのために子を賣うつて棺ひつぎを調とふ

一、京伯けいはくの母はは催さい氏は、子このために九經きゅうきやうを教をしゆ

一、朝あしたには早はやく起おちて髪かみを削けり、舅姑ししとくめにつかふまつれ

(20ウ)

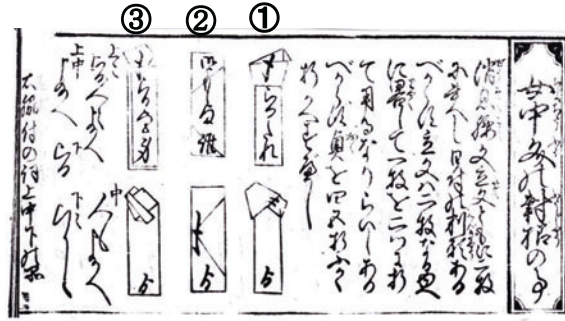
一、夕ゆつべにハおそく寝いて身みを治をさめ、心こころの正ただしからん事ことを願ねがへし

一、所帯しよたいを龐末そまつにするハ、酔伏あひふして本心ほんしんを失うしな

一、義理ぎりをかき禮れいを背そむくハ、よろづの畜類ちくるいに等ひとし

女中文の封様の事

消息・腰文・立文ともに二枚に書へし、日付の判形あるべからず、立文ハ二枚なるゆへに畧して一枚を二ツに折て用るなり、らしいあるべからず、奥を四五折ふかく折かへすべし



①

(表) 皆々様

(裏) より

②

(表) 御もし様

(裏) より

③

(表) 上るさま

(裏) より

上々…上る人々申給へ、

上中…申給へ、

中…人々申給へ

下…上る、

下々…まいらせ候

右脇付の詞上中下の品

腰文…書状の上包の端を縦に細く切り、これを巻いて帯封とし、先を挟んでその上に墨で封じ目をつけたもの。

立文・豎文…書状を礼紙で巻き、更に白紙で縦に包み、包紙の上下を筋違いに左右に折り、これを更に裏の方に織り込む。ひねりぶみ。

礼紙(らしい)…他人に送る書状などを巻き包む上包みの紙

(21才)

- 一、女の酒に酔たるハ見苦し、食に飽ぬるもはしたなし
- 一、心を慎ざれば八眠を生ず、身安ければおこりを好む
- 一、恭公の後伯姫ハ、節義を守りて焼失たまひぬ

(21ウ)

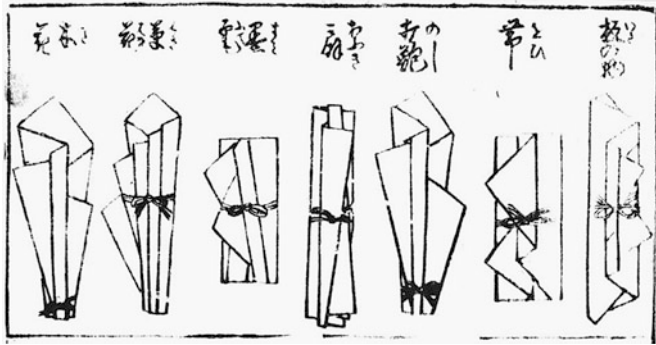
- 一、鄭督ハ行義乱さずして、終に夫人の位に昇給ふ
- 一、聞氏の女ハ孝の志深く、姑の両眼をねぶりて治す
- 一、張氏が妻ハ若して孀と成、貧しく営て姑をやしなふ

(22才)

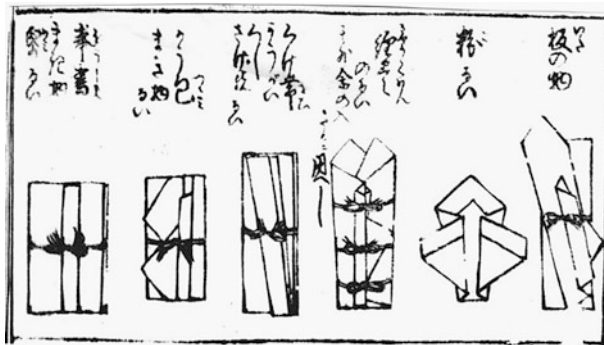
- 一、顧徳謙が妻ハ姑に孝を盡して、雷の難を遁る
- 一、此等の婦人は皆昼夜孝義を守り、名を後代に留
- 一、飯令綿を曳ぎ芋を績共、忠孝の志を忘るべからず

(22ウ)

- 一、又、物を縫糸をつむぐ共、心に節義守るべし
- 一、才ある人は賤しけれども、やんことなき人に交る
- 一、愚なる人は貴けれとも、賤の女にいやしめらる



- (右から)
- 板の物
 - 帯
 - 打鮑
 - 扇
 - 墨、筆
 - 草、花
 - 木、花



- (右から)
- 板の物
 - 粉
 - 経巻のるい
- 其外念の入たる二用へし
- くけ帯、かうがい、くし
 - さげ緒るい
 - かう包、まき物るい
 - 奉書、まき物、紙るい

(23才)

- 父の恩ハ須弥山のごとく、母の徳は巨なる海のごとし
- 恩を請て恩を忘るゝは、木の鳥の枝を枯すに等し
- 徳を蒙りて徳を思ハぬハ、鹿の草を損ることし

(23ウ)

- 或女ハ親のために僧を請じ、手箱に歌をそへて布施とす
- 獨の貧女ハ父母の魂祭に、一重の衣に歌をへて供養す
- 南筑紫が女ハ父のあとを慕ひ、尼と成て孝養す

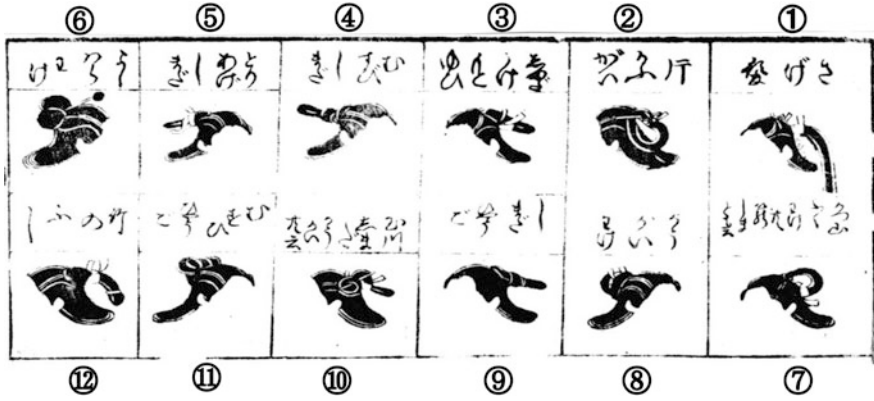
(24才)

- 微妙ハ遠流の父を慕ひ、白拍子と成て行来を求
- 孝貞ある人は仏神の憐により、願ひ満ざるハことなし
- 生死の命ハ常ならず、早く菩提を求むべし

(24ウ)

- 煩惱の身ハ浄からず、速に浄土をねがふべし
- 厭ふへきハ堪忍界也、逢ものは別るゝの苦ミ有
- 恐るべきハ六の巷なり、生るゝ者ハ死する悲しミ有

六の巷：六道の辻、分れ道。六道とは、仏教で衆生が輪廻の間にそれぞれの業の結果として住む六の境遇。地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天。



- ① さげ髪
- ② 片かふがい
- ③ しまかけもとゆひ
- ④ むすびしまだ
- ⑤ とりあげしまだ
- ⑥ よしはらわけ
- ⑦ かつ山ふくわけ共
籠しまとも云
- ⑧ かうがいわけ
- ⑨ しまだひようご
- ⑩ 玉川しまだかうがい共云
- ⑪ むすびひようご
- ⑫ 竹のふし

(25オ)

- 一、命はかげろふのごとし、朝に生れて夕に死す
- 一、身は槿の花のごとし、日の出るを待て萎易し
- 一、綾錦のよそほひは、全く後世の貯に非ず

(25ウ)

- 一、金白銀のたぐひは、たゞ此世ばかりの宝也
- 一、驕を究め身を飾は、さらに仏道の助にあらず
- 一、やくとなき人の寵愛に預も、たゞ現世の楽みのミ

(26オ)

- 一、松竹の契を寿ても、つゆの命消に程なし
- 一、鴛の衾をかさぬるも、若く艶しき間なり
- 一、女戒の七章といひて、をんなのいましめ七あり

それ、かみのしなハ、秋のせみの羽のすゝやかに、たて・よこ・ゆきと、
 をりたるごとく、うるハしく、くろきそよけれ、ゆひすかた、さげかミ
 本式也、中人以下の御方つねのかみハ、しまだかうがい也、いまやうの
 つとなし、やつしまだハゆう女のふう也、びんハおしだいすこと、すき
 たるは、ミだれやすくして、とりかふのごとくにて、見ぐるし、ひん
(生え下がり)
 のはへさがりをきりそるゆるハ、古ふう也、いまやうハ、のばせて、あ
 ぶらにて、つくるなり、かうがいわけハ、ミやづかへせし人のつとめ
(休憩)
 し、しまひて、きうそくのをりふし、さげかミハ、身持むつかしとて、
 くるくまハし、かりにかうがいにて、しめをきたるなり、そのさま、
(宿務)
 おもしろしとて、つねのゆひぶりとなれり、くびすちのはへぎハ、すり
(生衣)
 あげたるハ、はしたなく見ぐるし、あさゆう きぬにて、すりあらへば、
 うぶけのきてよし、かみのしなハ、人くくにあひたるふうあり、他
 にんの、りようけんにかせ給ふへし、ひんのかみのこぼれたるも、
(座)
 えんにして やさしきものなりとぞ

(26ウ)

- 一、卑弱といふハ、吾身を謙り心貌和らかなるをいふ
- 一、夫婦といふハ、天地に等しく節義の違ざるをいふ
- 一、敬慎といふハ、愼ことなくふかく愼ころをいふ也

(27オ)

- 一、婦行といふは、心だて正しくいさぎよく操を守るをいふ
- 一、専心といふは、心を一筋にして舅姑に事るをいふ
- 一、曲従といふは、己が理を曲て夫にしたがふをいふ

(27ウ)

- 一、和叔妹といふハ、心よく妯娌小姑に親しくするをいふ
- 一、身をつしミ義を守りて、慈悲の心深かるべし
- 一、飢たるものに食を施は、菩提の種なり

(28オ)

- 一、貧者に八宝を惜され、だから八菩提のさハリ也
- 一、乏しき家に生れて施べき力なくんば
- 一、他の施しを見るたびに、随喜の心を生ずべし

やまとこと葉 (一部抜粋)

- 一、おいろ とハ ベにをいふ
- 一、おひや とハ 水のこと
- 一、おさがり とハ 雨のこと
- 一、おしにし とハ しやうゆ也
- 一、なミのはな とハ しほのこと
- 一、雪のおまな とハ たらのを(魚)
- 一、からもの とハ 大こん也
- 一、身をしる雨(種) とハ なミた也
- 一、ふじのけふり とハ たへぬ思ひ
- 一、雲るのはし とハ かよひなき也
- 一、くずのうら風 とハ うらミをいふ
- 一、かたハれ舟 とハ よるかたなき也
- 一、うづミ火 とハ くゆる思ひ也
- 一、ミやびやか とハ うつくしき也
- 一、花たちばな とハ むかしを忍也
- 一、とまり舟 とハ つながれたる也
- 一、ほしあひの雲 とハ 行あふこと也
- 一、よすが とハ たより也
- 一、まめおとこ とハ しんじつ也

(28ウ)

- 一、心に憐こころみて一人いちにんに施ほどこさば、功徳くどく大なる海うみのごとし
- 一、身の為ためにとて数多あまたに施ほどこさば、報むくひを得ること芥子けしのごとし
- 一、水みづを手向たむけて廟びやうを祭まつる人は、早はやく仏ほとけの御心みこころに合あふ

(29オ)

- 一、華はなを捧たげて仏ほとけに供くつする人は、速すみやかに蓮はぢすの墓うてなにのぼる
- 一、一念いちねん十念じゅうねんのちからは、転輪王てんりんわうの位くらゐにも勝まさり
- 一、妙法華經めうほふけきやうの聞法もんぽうは、三千界さんぜんかいの宝たからにも勝すぐれり

(29ウ)

- 一、上うへは孝養かうやうの心こころさし深ふかく、中なか八夫やちふにつかふまつるべし
- 一、下しもは扁愛嬌へんあいきやうを盡つくさんとともに、貞心ていしんに守まもるべし
- 一、稚わかき人を導みちびかんがため、女戒童子教ぢよかいとうじきやうをしるす

(30オ)

- 一、見みる人ひとそしること勿なかれ、聞人笑きくひとわらふ事ことなけれ

女実語教 終

十二月の異名

正月	青陽 <small>せいぎやう</small> ・初春 <small>しよしゆん</small> ・端月 <small>たんげつ</small> ・臘月 <small>ろうげつ</small>
二月	如月 <small>きわづき</small> ・仲春 <small>ちゆうしゆん</small> ・令月 <small>れいげつ</small> ・陽月 <small>やうげつ</small>
三月	弥生 <small>やよひ</small> ・花月 <small>くわげつ</small> ・晩春 <small>ばんしゆん</small> ・桃月 <small>とうげつ</small>
四月	卯月 <small>うづき</small> ・首夏 <small>しゆか</small> ・麦秋 <small>ばくしゆう</small> ・孟月 <small>もちげつ</small>
五月	雨月 <small>うづき</small> ・皋月 <small>さつき</small> ・仲雨 <small>ちゆうう</small> ・京風 <small>けいふう</small>
六月	林鐘 <small>りんしやう</small> ・季夏 <small>きか</small> ・水無月 <small>みなつき</small> ・葉月 <small>はつき</small>
七月	文月 <small>ふみつき</small> ・亥則 <small>いそく</small> ・初秋 <small>しよしゆう</small> ・冷月 <small>れいげつ</small>
八月	南呂 <small>なんりよ</small> ・清月 <small>せいげつ</small> ・迎寒 <small>けうかん</small> ・王秋 <small>わうしゆう</small>
九月	長月 <small>ながつき</small> ・季秋 <small>きしゆう</small> ・菊月 <small>きくつき</small> ・暮秋 <small>ぼしゆう</small>
十月	玄英 <small>けんえい</small> ・陽月 <small>やうげつ</small> ・初冬 <small>しよとう</small> ・神無月 <small>かみなつき</small>
十一月	霜月 <small>しもつき</small> ・仲冬 <small>ちゆうとう</small> ・陽復 <small>やうふく</small> ・子月 <small>ねづき</small>
十二月	極月 <small>ごくげつ</small> ・臘月 <small>ろうげつ</small> ・大呂 <small>たいりよ</small> ・季冬 <small>きとう</small>

秋野七種



薄うすな すゝきのほのいてたるをおばなといふ 唐名 芒ぼう又 白茅ちがや

謹あさかほ ほにいてゝ なびく尾花のかたよりに ゆくかたしりき のべの秋かぜ
和名あさかほといふは むくげのこと也
今あさがほといふハ けんぎう花のこと也

けさのまの いろもはつかし あさかほの

花にくるゝ あきのしらつつゆ

蘭かちはかま 唐名 蘭らん

ぬししらぬ かこそ匂へれ 秋のゝに

たかぬきかきし ふちはかまかも

萬葉集第八、山上臣憶良 秋の野の花を詠する二首の歌あり

其一曰、秋のゝに咲たる花をておりて かきかぞふれば七くさのはな
其二曰、はきの花 おばな くずはな なでしこの花 おみなへし

また藤はかま あさがほの花